Ⅱ－1　平城宮の調査

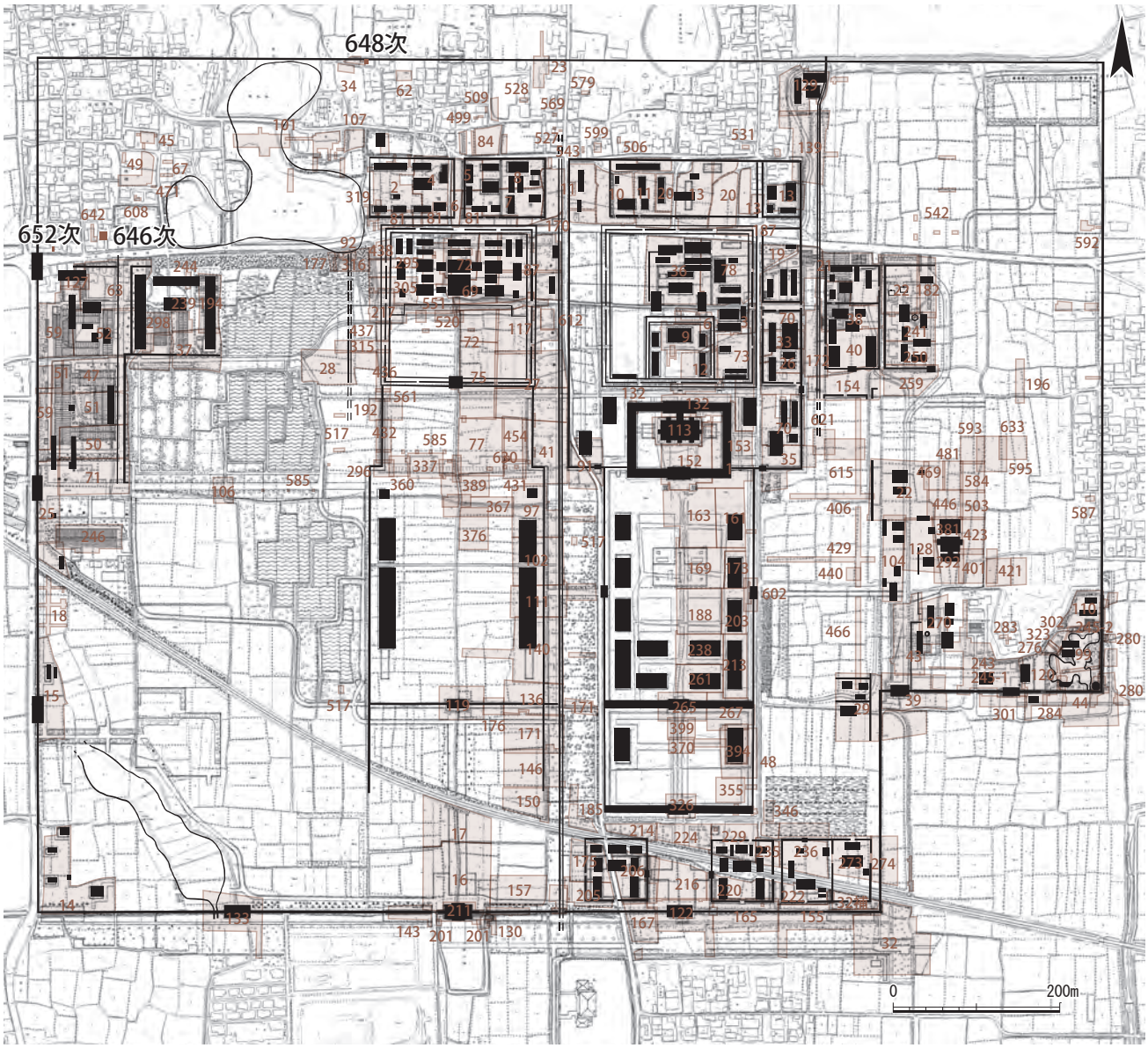

図72　平城宮発掘調査位置図　1：8000

1　平城宮の地理的環境

都城発掘調査部平城地区が発掘調査をおこなう地域のうち、平城京は奈良盆地の北、現在の奈良市に所在する。平城京の北端に位置する平城宮は、約１㎞四方の区画の東に、南北約755ｍ、東西約265ｍの張り出し部が取りつく非対称な平面形を呈し、その面積は約124haにおよぶ。北には奈良山丘陵が東西に展開し、東には菰川、西には秋篠川が南へ向かって流れる。宮内は北高南低の地勢で、現在の標高は65～75mである。

これまでの発掘調査やボーリング調査により平城宮の旧地形があきらかになった。北方の丘陵から南へ２つの支丘が伸延し、その支丘上には第一次大極殿院および内裏と第二次大極殿院、東院等の宮中枢部が並び建つ。第一次大極殿院の西側は北西から南東へ向かう谷となっており、その上流には灌漑池である御前池、佐紀池がある。内裏・第二次大極殿院・東区朝堂院と東院地区の間にも南北に走る谷が存在し、その北には水上池があり現在も谷の水源となっている。２つの谷は朱雀門から壬生門のあたりで平地化して南へ延びる。宮の西南部は旧秋篠川の流域であり、流路部分は低湿地、河川の両岸は微高地を形成している。

平城京廃都後、平城宮は次第に田畑と化す。戦後、土地を国有化する以前は、内裏や第一次大極殿院地区の北方に集落が存在するほかは、ほぼ水田であった。

2　平城宮の歴史的環境

平城宮造営以前、宮の範囲にはいくつかの遺跡が確認されている。宮西南の微高地上には、弥生時代後期の竪穴建物や方形周溝墓が存在した。このほか、壬生門付近、朝集院付近でも弥生土器が出土している。

内裏の北方には市庭古墳、その南には神明野古墳など５世紀の前方後円墳が存在したが、平城宮造営時に削平されたことがあきらかになった。また、東院地区には、５世紀の埴輪窯や埴輪棺もみつかっている。東区朝堂院から朝集院の範囲には、古墳時代の方墳や竪穴建物、同時代の土器、木製品が多量に出土した小河川などが存在した。古墳時代の集落跡と考えられる。

平城京遷都の詔は元明天皇により和銅元年（708）２月に宣布され、同年３月には造宮卿が任命、造営工事はほどなく開始された。地鎮祭や２度の行幸を経て和銅３年（710）３月10日に平城京に遷都した。この年から延暦３年（784）の75年間、平城京は日本の都であった。天平11～17年（740～745）、聖武天皇が恭仁京、難波京、紫香楽宮に遷都を繰り返した時期を境に、平城還都後は第二次大極殿を新設し、その南の東区朝堂院、朝集院を宮の中枢部とするなど、平城宮の構造は大きく変化する。長岡京遷都後に平城太上天皇が一時平城宮に居住するも、同天皇の没後は徐々に田畑化し、大きな開発もなく現代に至る。そのため、第二次大極殿や東区の朝堂などは基壇が高まりとして残存していた。その周囲の地形には宮殿や官衙等の区画を反映した地割りが保存されており、平城宮の構造を復原する上で貴重な情報となっている。

図 73　平城宮跡周辺を南から望む（2023 年 5 月撮影）

幕末の北浦定政により平城宮の範囲が認知され、その後、棚田嘉十郎・溝辺文四郎など地元の有志による保存運動によって、平城宮跡は大正12年（1922）に国史蹟に指定された。昭和27年（1952）年には国の特別史跡となり、平成10年（1998）には世界文化遺産「古都奈良の文化財」に登録され現在に至る。

奈文研による平城宮跡の継続的な発掘調査は、昭和30年（1955）に第一次調査を開始して以来、令和４年（2022）現在、平城宮の面積の38％ほどを発掘調査している。宮は築地大垣で囲まれ宮城門が設けられる。第一次大極殿院と中央区朝堂院からなる中央区、内裏・第二次大極殿院・東区朝堂院・朝集院で構成される東区、これら２つの中枢部のほか、東宮と苑池を中心とする東院地区、官衙区画、苑池等の存在があきらかになった。　**（今井晃樹）**